『妻たちと娘たち：日々の生活の物語（ギャスケル全集 6）』

Elizabeth Gaskell／東郷秀光, 足立万寿子訳
大阪教育図書

本　　館	請求記号：K/933/G99/6	資料ID：108519182

人間科学部教授　秋吉 美都

小説を読むことの意味はなんだろうか。情操を豊かにすることだろうか。娯楽だろうか。情操が乏しくとも生きてはいける。娯楽なら、スマホで猫のビデオでも見ればよい。是が非でも小説を読まなくてはいけない理由は無い。忙しい現代人は、実用書や専門書を読んだ方が合理的かもしれない。

ところが、おもしろいことに気がついた。私は社会科学の研究者で、無味乾燥な文章を書いたり読んだりすることが仕事だが、独創性に富む研究者には、文学や芸術に造詣が深い人が少なくないのだ。文学・芸術の素養は、優れた研究者の発見器に使えそうなくらいである。小説を読むことは特段のメリットが無いようにみえて、じつは創造のハビトゥスをも支えているのかもしれない。

ギャスケルの『妻たちと娘たち』は、1830年代のイギリスが舞台で、母を失った医師の娘が成長し、実らぬ恋に苦悩する物語である。地方貴族やジェントリ層との交流や、父の後妻やその娘との関係が描かれる。谷崎潤一郎の『細雪』や川端康成の『古都』をも彷彿とさせる物語である。プロットには大きなドラマは無い。だが、グレン・グールドがテンポを変えて「ゴルトベルク変奏曲」を演奏すると、聴衆は新しい音と驚きを古典に見出す（1955年と1981年の演奏の違いには驚かされる！）ように、ギャスケルの物語はよくある経験を掘り下げることにより、新しくかつ普遍的な美に到達している。人生にとってはそれだけでもうお得である。